

「道徳教育指導論」の工夫と改善方向

学校教育講座 杉田浩崇

1. 授業の概要

「道徳教育指導論」は教育学部の2回生を対象とした教職科目である。あわせて看護学科の学生も受講している。受講者数は84名であり、中には大学院生も含まれている。

「道徳の時間」に限らず、道徳教育は小・中学校のすべての教員が担当することになる。大学においてその能力を養成する科目は「道徳教育指導論」が唯一と言ってよい。そこで本授業では、15回を3つのステージに分けた。第一ステージは学校教育における道徳教育の位置を知る段階であり、「道徳の時間」の制度的・歴史的・国際的な特徴を紹介するとともに、価値多元時代に求められる道徳のあり方を解説した。第二ステージは、様々な道徳教育実践の方法をその理論とともに紹介・分析し、自ら根拠をもって方法を選択できるようになることを狙った。第三ステージでは、道徳教育実践を構想できるようになることを目標とし、映像鑑賞や私が実際にやってみせることで疑似体験をするとともに、指導案を二回にわたって作成してもらった。こうした①知識の獲得、②方法の選択、③方法の習得・活用という段階を学生に意識させることで、道徳教育を担当する教員にとって最低限必要な知見を伝えられると考えたのである。

授業の形態として、ほぼすべての回でグループワークを導入しているが、ステージを経るごとにその頻度を多くした。後段階に進むにしたがって、一般的な理論を具体的な事例に適用すること、自らの教育観に基づいた実践や方法を習得することが重視されているからである。たとえば、「手品師」という資料をグループで分析することで、心情を重視した場合と判断力を重視した場合に展開が異なることを発見してもらったり（第二ステージ）、ケースメソッドという方法を使って全体討論を行ったりした（第三ステージ）。

また、本授業では「授業参画シート」という名称で毎回の感想や課題を一枚のシートに記入してもらい、そこに私がコメントを付し

て毎回返却した。最終的に学生は、毎回の自分の感想とそれに対する私のコメントを一枚のシートで見ることができる。さらに、そのシートの裏には授業中の発言やMoodle上での発言を書く欄を設け、学生には自分の取り組みを記すことが期待されている。いわばポートフォリオのような役割を果たしており、実際学生にはそれらの記述に基づいて自己評価をつけてもらい提出してもらった。自らの学習を振り返ることで、第一ステージから第三ステージへの視点の深まり・拡がりを実感してもらうとともに、自身の道徳教育に対する見方を反省・確立してもらうことが狙いである。そのため私は、コメントを付すときに、その学生の教育観が現れている表現に注目した（たとえば、「話し合いがよかった」という感想に対して、「どうして話し合いがよいと考えるのか」などとコメント）。実際、私のコメントに再度自分の意見を書いてくる学生もあり、再コメントを付すこともあった。

授業では、「道徳を教える」だけでなく、「道徳的に教える」ことも大切だと伝えるとともに、私自身の討論の進め方や毎回のコメント返しなどを通して、教師の態度や工夫を明示的・暗示的に伝えた。実際、ケースメソッド授業を行った回の感想では、そこで扱ったケースについての感想だけでなく、どのように全体討論へと導いていくかという、教師目線に立った感想を書く学生もいた。道徳教育については、読物資料を使った単調な授業という小中学校の経験から、「おもしろくない」という先行イメージを持つ学生も少なくない。道徳教育指導論を担当する私が興味深い授業方法を探り、またときには失敗することは、教師の目線から主体的に道徳教育を考えるように学生の態度を変容させることに繋がると考えている。これは学生ではなく私の授業目標である。まだまだ成功とは言えないが、それは私の教育哲学の反映でもあり、今後も継続していきたい私の授業目標である。

2. アンケート結果

今年度実施したアンケートでは、1で述べたステージ化と、ポートフォリオ型の授業参画シートの効果を知る設問を設けた。「よかった」「まあまあよかった」「あまりよくなかった」「よくなかった」の選択と理由の自由記述を求めた。また、それらの設問のほかに、継続点・改善点について自由記述にて回答してもらった。以下、考察を加える。

設問①：「授業参画シートの形式を、毎回のコメント、授業中・Moodleでの発言、自己評価、改善してほしい点が一枚に記入でき、最後に通覧できるようにしました。私のコメントも含め、みなさん自身の学習プロセスが見えるようにするという意図がありました。これについてどう思いますか。」

この設問への回答は、「よかった」が43名、「まあまあよかった」が30名、「あまりよくなかった」が2名、「よくなかった」が0名であった。授業参画シートについては、概ね肯定的な評価を得たと言えよう。よかった理由としては、「授業が進むにつれて自らの学習の取組がどのように変化したのか、考えが深まった点などを振り返ることができた」というように、学習の過程や自身の考えの変化を見通すことができた点を挙げる学生が多かった。狙い通りの効果があったと考えられる。一方で、想定していなかったこととして、学生同士が互いのシートを見せ合い、私のコメントや他者の意見から様々なことを学んでいたようである。この点についてはMoodleへの投稿で促そうと考えていたので、今後Moodleでの課題との連携の可能性を探っていきたい。また、互いのシートを見せ合うことで、私のコメント量の相違によって学習意欲が減ってしまうという意見もあった。限りある時間の中でコメントしていることを理解してくれている学生も多くいるので、何らかの動機づけやコメントの基準などを示していく必要があると考えた。

設問②：「授業は、『第一ステージ 学校における道德教育の位置づけ』、『第二ステージ 道德教育の様々な方法』、『第三ステージ 道德教育の実際と構想』に分け、知識理解・方法の習得・実践的応用という段階ごとに配置

しました。これについてどう思いますか。」

この設問への回答は、「よかった」が25名、「まあまあよかった」が44名、「あまりよくなかった」が5名、「よくなかった」が0名であった。ステージ化については、評価として悪くはないものの、理由記述を見るとうまく機能していたとは言い難いことがわかった。確かに各段階に分けることで、見通しを持って学ぶことのできた学生もいた。しかし、各段階で分かれていることの意味を理解していない学生も少なからずおり、より一層の意識付けや意図の説明をする必要がある。加えて、改善点の記述を見ると、第一ステージから第三ステージへの変化が実感できない、第一ステージが難しい、第三ステージでの指導案作成を充実してほしいなどの意見があった。第一ステージは歴史や国際比較など学生にとって身近な内容を扱わないため、その後の学習に繋げにくい。また、第二ステージで取りあげた理論とそれに沿った方法がうまく結びついていなかったために、第三ステージとそれまでの学習の関連が見えにくくなっていた。実際の学校教員による特別講義が好評だったこともあり、学生はより実践的な知見を求めているのだと思われる。学校教員を目指す学生にとってイメージしやすい授業設計と教材の選定を行いながら、理論と実践を結びつける工夫を重ねていきたい。

3. 総括

本授業では、ステージ化ならびにポートフォリオ型の授業参画シートという工夫を行った。授業アンケートの結果を見ると、その狙い自体を否定する学生は見受けられないため、今後も同じ工夫を続けていこうと考えている。ただ、その工夫を効果的にするためには多くの課題や改善点があった。とりわけ、学生のニーズや学校教員として求められる力量をふまえると、道德教育の様々な実践や方法の学習を通して、理論的・メタ的な内容が学生の理解に結びつくように授業を設計し、教材を設定することが必要である。

私にとって、愛媛大学での「道德教育指導論」の授業は今年度がはじめてであり、大学教員としてのキャリアもまだ浅い。悩ましい課題だが、今回見えてきた課題や改善点を次年度に活かし、自己変容していきたい。